

展覧会概要

会期：2019 年 1 月 8 日(火)～3 月 24 日(日)

会場：戸栗美術館

所在地：東京都渋谷区松濤 1-11-3

開館時間：10:00～17:00 (入館受付は 16:30 まで)

※毎週金曜日は 10:00～20:00(入館受付は 19:30 まで)

休館日：月曜日

※1 月 14 日(月・祝)、2 月 11 日(月・祝)は開館。1 月 15 日(火)、2 月 12 日(火)は休館。

※毎月第 4 月曜日(1 月 28 日、2 月 25 日)はフリートークデーとして開館。

入館料：一般 1,000 円/高大生 700 円/小中生 400 円(団体 20 名様以上で 200 円割引)

※1 月 8 日(火)から 1 月 31 日(木)の間、新成人の方は入館料無料。

受付にて年齢の分かるものをご提示ください。

交通：渋谷駅ハチ公口より徒歩 15 分、京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩 10 分

※当館には駐車場・駐輪場はございません。近隣のコインパーキングをご利用ください。

美術館概要

戸栗美術館は、創設者 戸栗亨が長年に渡り蒐集した陶磁器を中心とする美術品を永久的に保存し、広く公開することを目的として、1987 年 11 月に、旧鍋島家屋敷跡にあたる渋谷区松濤の地に開館しました。コレクションは伊万里、鍋島などの肥前磁器および、中国・朝鮮などの東洋陶磁が主体であり、日本でも数少ない陶磁器専門の美術館として活動しています。



展示解説

当館学芸員による展示解説を行います。

■第 2・第 4 水曜 14:00～15:00
(1/9 1/23 2/13 2/27 3/13)

■第 2・第 4 土曜 11:00～12:00
(1/12 1/26 2/9 2/23 3/9 3/23)

■予約不要
(入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください)

フリートークデー

展示室でお話をしながらご鑑賞いただける日です。

■毎月第 4 月曜日 (1/28 2/25)

■10:00～17:00 (入館受付は 16:30 まで)

とぐりの学芸員講座

当館学芸員による深くやきものを学ぶ講座です。

■2019 年 3 月 4 日 (月) 14:00～ (学芸員 小西麻美)
「第三展示室—中国・朝鮮の青花—展示解説」

■2019 年 3 月 11 日 (月) 14:00～ (GM/学芸員 黒沢愛)
「古伊万里入門」

■各回 90 分程度 ■参加費 1000 円 (入館料別)
■先着 35 名様 ■要電話予約 (03-3465-0070)

ミニ展示解説

ポイントを絞って企画展をご案内します。

■フリートークデーの 14:00～14:30

■予約不要
(入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください)

次回展示

『佐賀・長崎のやきものめぐり』

4 月 6 日(土)～6 月 20 日(木)

戸栗美術館所蔵の佐賀・長崎のやきものをご紹介いたします。伊万里焼、鍋島焼をはじめ、その周辺地域で焼造された波佐見焼や古武雄といった古陶磁から現代の有田焼まで展示。



展覧会に関するお問い合わせ

公益財団法人戸栗美術館
広報担当 宛
〒150-0046 東京都渋谷区松濤 1-11-3
TEL : 03-3465-0070 FAX : 03-3467-9813
URL : <http://www.toguri-museum.or.jp/>
E-mail : kouhou@toguri-museum.or.jp



初期伊万里

—大陸への憧憬—展

2019.1.8(Tue) — 3.24(Sun)

日本初の国産磁器として誕生した伊万里焼。佐賀鍋島藩士であった山本常朝(1659～1719)の談話を聞き書きした『葉隠』(1716)によれば、有田皿山は佐賀鍋島藩祖・鍋島直茂(1538～1618)が朝鮮出兵(1592、93、1597、98)より帰陣の際、「日本の寶だから」とするよう、朝鮮人陶工を数名連れ帰ったことにはじまるといいます。伊万里焼のはじまりには、朝鮮からの技術の流入があったのです。その一方で、文様は中国風の画題が主。技術の大元は朝鮮のものであっても、当時磁器大国であった中国の製品を意識していたようです。

このような、朝鮮の技術をもって製作し、中国風の絵付けを施した草創期の伊万里焼を「初期伊万里」と呼んでいます。伊万里焼が作られはじめてから30年ほどの間ですが、草創期らしい自由で大胆な筆遣いの作風が親しみやすく、この時期ならではのおおらかさが魅力です。

今展では中国・朝鮮陶磁を含む約70点の作品から初期伊万里の中に垣間見える朝鮮からの影響、中国への憧れを中心に、初期伊万里の魅力をご紹介いたします。

《初期伊万里》

日本初の国産磁器である伊万里焼が誕生した 1610 年代から、1630 年代頃までの作品群。現在の佐賀県・有田を中心とした地域で作られた。作品は染付が中心。

《染付》

白地に青い絵付けが施されたうつわとその技法を染付という。呉須と呼ばれる酸化コバルトを発色元とした顔料を用いる。中国・朝鮮磁器では青花と呼ばれる。

《貸出画像について》作品①～⑤の写真データ等をご用意しております。ご掲載の際は、別紙の写真借用申請書をお送りください。

白磁 皿

朝鮮時代（15-16 世紀）
口径 21.7 cm
口縁を鐔縁(つばぶち)とした端正な白磁の中皿。朝鮮半島では 9～10 世紀頃より白磁の生産がはじまる。儒教国家であった朝鮮王朝では白磁が好まれ、生産の中心とされた。



①白磁 皿 伊万里

江戸時代（17 世紀前期）
口径 20.3 cm
口縁を鐔縁(つばぶち)とした白磁の中皿。現存する初期伊万里の中皿は染付が多く、白磁とするのはやや珍しい。同形の白磁が朝鮮でも焼造されている(左)。伊万里焼と朝鮮磁器との技術的な繋がりを感じさせる作例。

1 章 朝鮮との関わり

朝鮮出兵（1592～93/1597～98）の際、連れ帰られた朝鮮人陶工の技術を元に誕生した伊万里焼。そのため、初期伊万里の器形や製磁技術には朝鮮磁器と共通するものがみられます。伊万里焼誕生前夜の朝鮮陶磁の歴史から技術の伝播による伊万里焼誕生までの流れを、朝鮮陶磁と伊万里焼からご覧ください。



②染付 雲龍文 鉢 伊万里

江戸時代（17 世紀前期）
口径 45.5 cm
初期伊万里としては最大級に属する大鉢。細い線描と大胆な太い線とで、唐草文のような雲と躍動的な龍を描く。初期伊万里では角のない龍が描かれることが多く、本作のように爪や角を持った立派な龍は珍しい。龍は古代中国よりみられる想像上の生物で、中国磁器にも描かれる。



③染付 吹墨白兔文 皿 伊万里

江戸時代（17 世紀前期）
口径 21.0 cm
兎・雲・短冊の形に切った型を置き、呉須を霧状に吹き掛け、白抜き文様とした吹墨の作品。兎の顔や文字は筆で描き加えている。吹墨は中国の古染付に見られる技法で、初期伊万里にも多い。吹墨による兎文の皿についても、古染付の中に近似した作例が存在する。

2 章 中国への憧れ

白磁中心の朝鮮磁器に対して、初期伊万里が目指したのは中国磁器のような染付。文様にも龍や兎、山水など中国由来の意匠が多く見られます。また、初期伊万里がつくられた時代、古染付や祥瑞といった中国磁器が茶の湯に取り入れられていたため、初期伊万里でも水指や香炉などの茶道具が焼かれました。中には、そうした中国磁器の器形や文様を写した作品も存在し、その憧れが窺えます。



青花 楼閣山水文 水指 景德鎮窯

明時代末期（17 世紀前期）
高 18.5 cm
中国・明時代末期、天啓年間(1621～1627)を中心に景德鎮民窯で焼かれた素朴な作風の青花磁器を日本では古染付と呼ぶ。特に日本の茶人に好まれ、日本に多く伝世している。厚手の器形、自由奔放な絵付け、虫喰いと呼ばれる釉薬の剥がれは古染付の特徴。



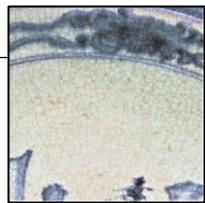
染付 楼閣山水文 芋頭水指 伊万里

江戸時代（17 世紀中期）
高 17.8 cm
胴部の中ほどから胴裾にかけて膨らんだ芋頭(いもがしら)と呼ばれる器形の水指。胴部には楼閣山水文を描き、口縁の周りには雷文をめぐらす。本作は古染付の器形・文様に倣って作られたもので、口縁の釉薬の剥がれは、古染付の特徴である虫喰いを写したものの。

中国由来の意匠

3 章 初期伊万里の特徴と魅力

誕生まもない初期伊万里には、器形の歪みや貫入、指跡などがみられます。それらは、伊万里焼の発展と共に見られなくなる草創期ならではの特徴です。装飾は染付の青一色が基本ですが、その中でも線の強弱や濃淡の駆使、絵具を霧状に吹きかける吹墨など豊かな表現がみられます。一点一点表情の異なる初期伊万里の作品を通して、その魅力をご紹介します。



【貫入】

釉薬に入ったヒビ。初期伊万里では、意図せず入った貫入が景色となる。

④染付 楼閣山水文 鉢 伊万里

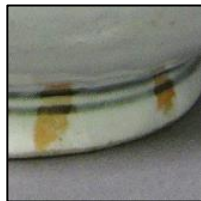
江戸時代（17 世紀前期）
口径 35.0 cm
口縁を鐔縁(つばぶち)にした大鉢。見込には奥行きを感じさせる楼閣山水文を力強い筆致で描く。その周りには菊唐草文と花文がめぐる。釉薬は青味を帯び、初期伊万里特有の全体に入った細かい貫入が味わい深い。

⑤染付 蝶文 壺 伊万里

江戸時代（17 世紀前期）
高 13.6 cm
丸みのある胴に高く立上がった口をつけた壺。初期伊万里によく見られる器形。頸部に渦巻文をめぐらせ、胴部の蝶は濃淡の異なる染付でそれぞれ塗られている。なだらかな器面を軽やかに舞う蝶と柔らかい釉調が相俟った穏やかな印象の作品。

【指跡】

施釉の際、うつわを持っていた箇所には釉薬がかからず、露胎となった部分。製作に携わった陶工の存在を強く感じさせる。



特徴と魅力

《同時開催》

『初期伊万里—大陸への憧憬—展』
関連展示 「中国・朝鮮の青花」

中国・江西省景德鎮窯で技術が確立した青花。今展では元代から明代万暦までの中国磁器と朝鮮半島の青花を時代の流れに沿ってご紹介いたします。約 15 点展示。